

論文

外国語学習がもたらす可能性について ：自己、モチベーション、ビリーフ

鈴木 栄

Impact of Learning Foreign Language
: Self, Beliefs, and Motivation

SUZUKI Sakae

はじめに

外国語を学ぶことで人はどのように変わるのか。なぜ外国語を学び続けるのか。こうした根本的な問いがあまり議論されず、英語学習に関しては、グローバル世界に対応するために英語は必須、という考えの基に、幼少期からの英語学習・英語教育が進んでいる。

英語を学ぶことで人が変わる可能性を正の可能性、負の可能性も含めて考える必要があるように感じる。

生徒・学生への問い、「なぜ英語を学ぶのか」に対しては、「就職に有利だから」、「TOEICの点を上げるため」、「将来海外企業で働く可能性もあるから」などの答えが予想されるが、教える側への質問、「なぜ英語を学ぶのですか」という問いにはどのように答えるのであろうか。

Williams & Burden (1997) は、外国語を学ぶことは、他の教科学習と異なる、と述べている。それは、言語の社会的な要素にある。外国語を学ぶことは、「自己のイメージを変えることであり、新しい社会的、文化的な考え方や存在のあり方を受け入れることである、ゆえに、学習者の社会的な性質に重要な影響をもたらす」としている。つまり、第二言語を学ぶことは、究極的に、別の社会的な存在になることであるとも言える。

外国語を学んだことで、性格が変わった、あるいは自分の中に2つの世界を持つようになった、と言う人もいる。また、「英語を話している自分は、日本語を話している自分とは違う気がする」と言う人もいる。これらの言葉は、外国語を通して、外国の文化に触れ、異なる価値観を知ること、ある種の自己変容が起こることを示唆している。そうした自己変容の可能性を、外国語を教える側も、学ぶ側も知ることが必要であろう。

第二言語習得に関して、こうした変化は、特に、「自己 (self)」や、「信条 (belief)」に焦点をあてて研究がおこなわれてきた。自己・信条は、言語学よりも心理学に属するものである。

第二言語習得におけるモチベーション研究の第一人者である、Nottingham University の Zoltan Dörnyei (2010) は、「研究の新しい流れに遅れないために、応用言語学の研究者は、心理学のアプローチに詳しいことが求められる」、と言及している。認知言語学 (cognitive linguistics) と、心理言語学 (psycho linguistics) との違いは、前者の研究者は、言語学への興味が先に来て、認知が次であり、後者の研究者は、心理学者で言語に関心がある、と述べている。言語教育者は心理学的なアプローチを知っているべきである、という Dörnyei の言には、賛成である。言語教育者は、文法 (grammar) や、学習方略 (learning strategies) などの知識を伝授するが、教室という世界で、教師と学習者が共有する時間には、両者の人間的な交流があるべきであり、教える側は、学ぶ側の気持ち、感情を理解することが、教える上で重要であるからである。Dörnyei は、今後の心理言語学についての杞憂を述べている。それは、彼が言うように、第二

言語を教える分野にいる人たちは、心理言語学に対する興味は無く、それに時間と労力を注ぐ気が無い一方、心理言語学を研究する人たちは、実際の教育経験をもたない、という現実があるのかもしれない。

本論では、外国語学習における心理的側面である自己、および変容を、モチベーション、ビリーフの最近の研究の傾向に言及しながら、英語を学ぶことで変わる自己、英語学習の影響について考え、第二言語習得研究、および日本における英語教育への示唆を論じたい。

I 外国語学習における自己変容

1 モチベーション研究における想像的自己

モチベーション研究の最新の動向では、Dörnyeiが、社会教育的モデルを応用したモチベーション研究で、The L2 Motivational Self System (Dörnyei, 2005) において主張した、自己(self)を軸とした考え方がある。Gardner (1985) の研究チームによる研究に始まる、これまでのモチベーション研究における、融和的志向性 (integrative orientation)、あるいは、道具的志向性 (instrumental orientation) だけでは、例えば、日本のように英語を第二言語ではなく、外国語として学習している国の状況、あるいは、複雑なモチベーションのしくみを説明するには充分でないことがわかってきた。

Dörnyeiが主張する、第二言語のモチベーションにおける自己システム (L2 Motivational Self System) は、3つの要素で成り立つ。理想的な第二言語における自己 (ideal L2 self)、第二言語におけるあるべき自己 (ought-to L2 self)、第二言語体験 (L2 learning experience) である。自己の理想と現実のギャップを埋める意欲から学習への動機づけがなされると主張しているわけである。

理想的な第二言語における自己 (ideal L2 self)、という考え方は、理想的な自己への変容を望み、第二言語を使う理想的な自己像を持つことで、

それが、学習へのモチベーションになる、という見方である。

第二言語におけるあるべき自己・義務的な自己 (ought-to L2 self) という考え方は、外的要因 (親・教師の期待、出世、受験など) による自己変容への願望や、否定的な結果を生まないようにしなければいけないと考える、あるべき自己をもつことがモチベーションになる、という見方である。これは、過去のモチベーション研究における外的な (extrinsic) タイプのモチベーションである。

第二言語体験 (L2 learning experience) は、学習者は、学習環境や経験によって動機づけとなった状況に特化したモチベーションを持つ、とする見方である。(例としては、教師の影響、成功のよい影響、英語コースの楽しい内容、同級生の影響などである。)

Dörnyeiは、学習達成には、学習者の経験に基づく未来像が明確で、そこに向かう努力が必要であり、教員や学習経験の影響といった第二言語学習経験も、短期的な自己誘導に貢献する、としている。

このように、Dörnyeiは、未来の自分の理想像に向けて、学習者が実現可能な自己像を経験から内発的・外発的に構築し、自己誘導 (self-guides) することを第二言語モチベーションのセルフ・システム (L2 Motivation Self System) 理論において指摘した。

Dörnyeiに先立ち、Markus & Wurf (1987) が示した、可能な自己 (possible selves) という考え方がある。これは心理学の分野での研究である。彼等によると、possible selvesは3つの顕著な部分から成り立つ。つまり、期待される自己 (expected self)、自己への希望 (hoped-for self)、なりたくない自己への恐れ (feared self) である。このどれもがモチベーションに影響を与えられられる。期待される自己 (expected self) は、自分が実際、将来こうなるであろうという考える自己であり、自己への希望 (hoped-for self) は、必ずしも実現するとは限らないが、そうなりたいと考える自己、なりたくない自己への恐れ (feared self) は、そうなってほしくない自己への恐れ、である。

この可能な自己 (possible selves) という見方は、モチベーション研究に大きな影響を与えた。MacIntyre, Mackinnon & Clement (2009) は、具体例として次のように述べている。「例えば、カナダでイマージョンとしてフランス語を学ぶ学生は、バイリンガルになりたいと思い、フランス語を流暢に話せることを願うと同時に、ケベックへの旅行でフランス語が話せないために迷子になってしまうことを恐れるだろう。このケースでは、3つの可能な自己 (possible selves) が交差し合い、それが外国語を学ぶ理由、あるいは動機になっていると考えられる」。

1-1 モチベーション研究における自己に関する研究事例

自己変容に関する、第二言語習得におけるモチベーション研究の例をあげる。

事例1：Taguchi, Magid, and Papi (2009)

日本、中国、イランの5000人の学生（日本人学生平均年齢19.1、中国の学生平均年齢21.1、イランの学生平均年齢17.4）を対象に、3タイプの質問紙（①英語学習に対する学習者の態度・モチベーション、②学習者の背景、③6件法で答える質問）を使用した。③では、第二言語における理想的な自己 (ideal L2 self)、第二言語のあるべき、あるいは義務的自己 (ought-to L2 self)、家族の影響、道具的要素 (出世)、道具的要素 (防御)、外国語学習への考え方、異文化への興味、第二言語コミュニティへの興味、融和性を問う質問が使われた。

主要な発見は、融和傾向 (integrativeness) は、第二言語における理想的な自己 (ideal L2 self) と置き換えることができることとし、そのことで、第二言語モチベーションのセルフ・システム (L2 Motivational Self System) を支持する結論となった。

事例2：Cszer and Kormos (2009)

ハンガリーの高校生202人、短大・大学生230人対象に、5件法による質問紙で研究をおこなった。項目に含まれたものは、親の励まし、L2学

習経験、知識、国際志向、第二言語における理想の自己 (ideal L2 self)、第二言語における義務的自己 (ought-to L2 self)、動機づけのある学習態度、である。主に、第二言語における理想的な自己 (ideal L2 self)、第二言語のあるべき自己・義務的自己 (ought-to L2 self) がハンガリーの外国語を学習する学生にどのような影響を与えているかを調べるのが目的であった。

結果1：高校生も大学生もやる気のある学習者の態度は、第二言語における理想の自己 (ideal L2 self) で決定される。

結果2：高校生の場合は、言語学習への努力は、言語学習経験の方が、第二言語における理想の自己 (ideal L2 self) よりも強く、大学生の場合は、言語学習経験と第二言語における理想の自己 (ideal L2 self) がほぼ同等に影響を与えている。

この結果は、動機づけを与える教育実践 (Dörnyei, 2001) の必要性を裏付けるものとなった。また、自主的な学習 (self-regulated learning) は、生徒・学生が学んでいる言語を使う将来の自己像を持っていなければ可能でないことを示している。また、生徒・学生が、将来の自己を描くのは年齢によって変わることもわかった。

事例3：Yashima (2009)

191人の日本人高校生対象に、質問紙により、国際志向性 (international posture)、第二言語コミュニケーションへの興味 (L2 WTC: Willingness To Communicate)、コミュニケーションの頻度、第二言語における理想の自己 (ideal L2 self) を調べた。

結果1：国際志向性は、将来の国際コミュニティにおける英語使用による参加が可能な自己を反映している。

結果2：学習成果が高まるにつれて、理想の自己が広がり、現在の自己が徐々に理想の自己へ近づいて行く。つまり、第二言語を学習することが、自然に個の自己に融和するにつれて、第二言語を使うことが日常的になってくる。そして、国際志向性とコミュニケーションの頻度が高い学習

者は、理想の自己を強く描くようになる。

Yashimaは、「日本人のEFL学習者の心の中では、語彙を暗記したり、テキストを音読する、といった語学学習は、理想の自己の構築へは繋がらない」と述べている。

事例4：Tanaka (2011)

10人の大学生を18ヶ月間観察し、インタビューなどでデータを収集した質的研究である。10人の学生は、英語学習に対する高いモチベーションを持っている。10人のモチベーションは、コンテキストによって変化をするが、それぞれが独自のアプローチを選んでいることから、モチベーションの多様な面がわかる。

英語は、10人の学生にとっては自己表現の手段であり、アイデンティティを模索する手段でもある。学生の目には、英語は、日本人でない人々とのコミュニケーションの役割を越えたものになっている。このことは、英語を習得するモチベーションは個人の自己意識に繋がっていると言える。10人の学生は、第二言語を使う自分の理想像を、それぞれの立場で作りあげている。早期の国際経験（思春期）は、第二言語における理想的な自己（ideal L2 self）の構築に貢献している。

第二言語のモチベーションの変容はコンテキスト（学習者が交流するクラスやコミュニティ）に影響を受けるが、コンテキストへの反応は、学習者一人ひとりによって異なる、としている。

2 外国語学習に関するビリーフ（信条）の変容

自己の変容の一つに、認識、考えの変化があげられる。言語を学習する環境、状況などによって、自分が抱いていたビリーフが変化したり、新しいビリーフが誕生することもある。

Horwitz (1987) が作成した、ビリーフを探求するための質問紙BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) は、原文のまま、あるいは改訂されて多くのビリーフ研究に使われてきた。ここでは、ビリーフは、

ある程度固定したものとして扱われており、変化についてはさらに研究の余地がある。

ビリーフ研究の中で、ビリーフの変化・自己の変容に焦点をあてた研究の例をあげる。

2-1 ビリーフ研究における自己変容に関する研究事例

事例1：Tae-Young Kim, Jin-Suk, Yang (2011)

Kim & Yang (2011) は、2人の韓国人の学生の考え方が、アメリカ留学でどのように変化したかを研究した。27歳（男性）Yongは電子専攻の学生で、英語能力が仕事のチャンスを広げると信じ、アメリカの語学学校で英語を勉強することにした。Yongは、次のように言っている。「海外留学が英語のスピーキング能力を伸ばすのにいいと聞いている。僕もそう思う。できるだけ多くのネイティブスピーカーと話すことで、自分の考えを苦もなく表現できるようになると思う。」アメリカに留学してからは、Yongは、英語で話す機会を掴み、ネイティブスピーカーのルームメートを持ち、パーティーなどにも積極的に参加した。しかし、Yongは、英語が話せる友人がTOEICの点数が低かったことで仕事を得ることができなかったことを知り、TOEICのスコアを伸ばすことを新しいゴールとした。TOEICのスコアを伸ばすためには留学していなくても、本国で集中学習を受ければ可能であるとわかり、留学に対するモチベーションが下がってしまった。

もう一人の学生、Hye-In（女性）は、32歳で養護教諭であるが、アメリカの大学院で心理学を勉強するために英語を勉強したいと考え、コストの安いフィリピンに留学をした。留学前は、Hye-Inは、ネイティブスピーカーの教師からのフィードバックがあれば、アメリカの大学院に進学するために必要なライティングの力が伸びると信じていたが、彼女が効果的であると感じたのは授業よりも地元のL2を話す人たちと英語を使ってコミュニケーションを取ることであった。「地元のコーヒースョップの店員

と出会ったの。彼女は韓国の文化に興味を持っていたのでお互いに母国語を教え合ったりしたの。」Hye-Inは、結局は自分で学ぶコンテキストを、語学学校の教師、そして地元の人達の中で見つけたことになる。

事例2：Tae-Young Kim, Jin-Suk, Yang (2010)

2人の韓国人の学生のビリーフが留学体験という新しい第二言語のコミュニティにおいてどのように機能し、どのような変化を見せたかについて研究をした。

Seon-Hee (26歳女性) は、カナダでの留学プログラムに参加した。彼女は、「第二言語を実際に使う回数が増えることで第二言語能力が向上する」というビリーフを持っていた。大学の専攻は、英語教育 (English education) で、TOEICは750-860である。空手の得意なSeon-Heeは、カナダの大学で空手クラブに入り、英語で英語を母語とする人達との交流をした。この経験を通して、Seon-Heeは、単に第二言語を使うだけでなく、多様な言語のフォームを使うことで会話の質を高めることが必要であり、コミュニケーションのために文法を勉強することが重要であると考えようになった。このビリーフの変化により、Seon-Heeは、その後の留学期間におけるモチベーションを維持することができた。

Jane (26歳女性)は、アメリカでの留学プログラムに参加した。彼女も、「第二言語のインプットが豊富な環境にすることで第二言語能力が向上する」というビリーフを持っていた。大学の専攻は、English studies (英語学) で、TOEICは、950である。Janeの韓国での英語学習は、個人的な学習であり、それは韓国という社会に根ざしたものであった。実際にアメリカに行き、彼女の期待は裏切られた。間違いを気にするあまり、授業では発言ができず、地元の人達との交流もうまくいかなかった。そして、自分は、外国人で英語が充分でないため無視されると感じるようになった。そうしたマイナスの経験により、英語を使う機会も逃し、英語を勉強することに対するモチベーションが下がってしまった。

結論として、Kimは、ビリーフは固定したものではなく、学習者が体験

した交流・交換の結果であり、自らが発信したディスコースの結果であることから、変容するものである、とした。また、Seon-HeeとJaneのビリーフの変化が示しているように、留学のコミュニティに属しているという感覚を持てなければ成功感覚を得ることはできないことから、留学では、様々なコミュニティに参加することが重要であるとした上で、学習者の個人的な性格といったものも、同じ状況にありながら異なる経験をする要因になるかもしれないことを指摘し、こうした研究では、多様な研究方法や分析が必要であるとしている。

事例3：Suzuki (2011)

本研究は、6人の高校生のビリーフがどのように変化し、作り上げられるかを長期研究で探ったものである。6人のストーリー (story) を、語り (narrative) によりまとめ、その中でのビリーフの変化に焦点をあてた。

3-1 学習者のストーリー

学習者のストーリーの重要性については、Benson & Nunan (2004) が、個々の学習者がどのように外国語を学んだか、そのプロセスに焦点を当てること、それぞれのプロセスでどのような経験を積みあげていくのかを知ることの重要性を強調している。ストーリーは、目に見えない (invisible) 学習者にスポットライトを当てることにも繋がる。

Fumiko's Story

「私は、国を越えた部分、例えば、異なる母語を持つ人々の繊細な感情や表情を垣間見る。異なる地を踏み、異なる風を感じる。そのような瞬間に、自然と胸が震え、交流することの意義を見出します。それらはまるで、遠い存在であった何百年も前の物語に感動を覚えた時の様です。」これは、ある高校の卒業式に卒業生代表としてFumikoが述べた言葉の一部である。この生徒は、小さい頃、父親の影響で音楽が好きになり、英語の歌をよく聴いていた。また、アメリカ軍の基地に遊びに行ったこともある。身の回りに英語があったことも手伝って、英語に興味を持っていた。

中学生の時も英語は一番好きな科目だった。いじめに合ったこともあるが、そういう時にも「自分には英語がある」と信じ、いじめを乗り越えた。外国語教育に力を入れている高校に行き、英語の授業を誰よりも多く履修し、現在は、上智大学で英文学を勉強している。オックスフォード大学に留学し、好きなイギリスの詩人の生誕地を訪問したり、英文学の授業を受けている。

Kazuo's Story

Kazuoは、ペルーで生まれた。父親の仕事の関係で家族でペルーに住んでいた。生まれてから高校進学まで15年間ペルーにいたが、家庭内では日本語を使い、現地の日本人学校に行っていた。家には、ペルー人のヘルパーがいて、スペイン語を話していたのでKazuoは、スペイン語が会話程度はできた。両親が、Kazuoに英語を勉強させたいと考え、日本人学校の中学校に入ってから、現地の塾に通うようになった。英語の授業は、外国留学をしてきたペルー人教員がすべて英語でおこなった。日本人学校での授業は文法中心であり面白くなかったようである。塾での英語の授業にもモチベーションは上がらなかった。中学2年生の時に、Kazuoにとってターニングポイントになった出来事が起こった。Kazuoは、日本にいる親戚を訪問するため一人で飛行機に乗った。その時、たまたま隣に韓国人の女性が座った。Kazuoとその女性は英語を通して話を始めた。2人の共通言語は英語だった。その経験は、Kazuoが、「自分の話した英語が通じた!」と感じた初めてのものであった。それ以降、Kazuoは、英語はコミュニケーションの手段であると信じ、英語で話すことが面白くなってきた。高校では、英語の授業、特に発表型の授業に参加し、ESS（英語部）を立ち上げ、留学生とも積極的に交流した。3年になった時に、Kazuoは、それまで話すこと（speaking）が英語の学習で一番重要であると考えていたが、留学生と話をし、授業の中で討論、ディベートをするうちに、文法の学習も自分の英語の発進力を伸ばすには必要なものであると感じるようになった。大学は、秋田教養大学（AIU）に進学した。AIUでは授業はすべ

て英語でおこなわれる。Kazuoから来た手紙には次のように書かれていた。

「大学、すごく楽しいです。雰囲気は高校に似ています。留学生たちとも友達になりました。毎日、英語漬けです！勉強は大変です。以前と同じで文法に悩まされています。でも、ここにいることは楽しいし、生活は充実しています。実際、1日、24時間以上ほしいです。とにかくここに来てよかったと思っています。」

Rumiko's Story

Rumikoは、海外に一度も行ったことがない。小さい頃、英語を特に習っていたことも無い。ただ、母親が、Rumikoが英語に関心をもつようにと、家のトイレに英語のアルファベットの書いてあるポスターを貼り、Rumikoは毎日それを見て、いくつかの英語の単語を覚えていた。中学生の時に英語を習ってから英語に興味を持ち、学校の勉強も一生懸命したので、成績も良く、クラスの生徒からは、Rumikoは英語ができる、と思われるしており、自分でもそう思っていた。ところが、高校に入学し、英語の上級クラスに入ると、海外帰国生が何人かいて、アメリカ人のように流暢に英語を話す姿を見て、Rumikoは自分の英語の力に全く自信がなくなった。英語が話せない自分はだめだと考えるようになり、さらには、自分が英語を話せないのは、日本の英語教育と自分に海外経験が無いからだと考えようになった。塾の英語の先生が好きで、自分も将来は英語の教師になりたいと考えていたが、帰国子女に会ってからは、英語が話せない英語の教師は失格であると考え始めた。それでも、教えることには興味があったRumikoは、小学校への英語の出前授業に参加した。進路を考える時には、教育学部に行ったが、教員ではなく、教材を作成することで教育に貢献できると考えるようになった。大学に進学したRumikoから次のような手紙が来た。

「高校を卒業してからご無沙汰しています。大学での生活は楽しいです。5月病は切り抜けました（笑）。今のところ、基礎科目と必修科目をとっています。後期には専門科目の教育関係の科目を取ります。外国に行

くまでは絶対に英語ができるようにならないと思っていましたが、最近、自分で英語の勉強を始めました！大学では、英語コミュニケーションを取ることになってるんですけど私は英検2級合格したので取らなくてもいいんです。就職は難しいようなので、TOEICで高得点を取っておくと有利かと思っています。実を言うと、自分で英語を勉強し始めたのは日本語が全くできないアメリカ人と話したことがきっかけです。彼と英語を話すのは大変でしたし、できなくて恥ずかしかったです。だから英語を勉強しようと思いました。」

Natsuko's Story

Natsukoは、高校を2つ経験している。Natsukoの母親は、海外旅行が好きで、一人っ子のNatsukoを連れてアジアの国によく旅行をした。その影響もあり、Natsukoは、「外国」という雰囲気、異文化には興味を持っていた。中学受験をして、私立の難関校に合格した。やっと受験勉強から解放されると思っていたが、その学校は受験校で、高校1年の時から大学受験を目指し、かなりハードな受験勉強が展開されていた。中学校で受験を経験したNatsukoにとっては、受験勉強だけの毎日は、苦痛になっていった。高校1年の時に、たまたまフィリピンへの短期研修の募集があり、応募した。希望者は2人であった。面接試験を受け合格したNatsukoは、フィリピンに行き、約3週間ホームステイをして地元の学校に通った。（注：フィリピンの学校は、公用語が英語であるため授業は英語でおこなわれている）3週間のフィリピン滞在は、Natsukoにとってターニングポイントになった。スモークーマウンテンでゴミを拾って家庭の収入にする子供達を知り、やさしいホストファミリーに出会ったことで、日本にいたときの価値観が変わって来るのを感じた。「受験受験と考えていた自分がばからしくなった」と言っていた。また同時に、英語でコミュニケーションをすることに関しても考えるようになった。その時の経験をNatsukoは次のように語っている。

「英語できなくても、伝えようと思わないと伝わんないと思って、とり

あえずなんか周りを気にせずしゃべれるようになった。中学の時は、帰国子女がいるし、英語恥ずかしいよ、帰国の前じゃしゃべれないよ、だったけど、フィリピンに行ったら、そんなこと言ったらなんもできないじゃん、まずしゃべろう、と思って、辞書を使うなり、ジェスチャーだった。その時使った単語は覚えてる、だからなんか英語うまくなったっていうよりも、伝えようと思えるようになったって感じ。」

帰国後、Natsukoは、受験一色の学校生活に疑問を抱き始める。両親に相談をし、他の学校への編入を考えるようになった。そして高校2年生で、公立の学校に編入した。その学校は、外国語教育や国際交流に力を入れてしていると知り、彼女は自分のしたいことがその学校でできるのではと期待をした。高校に入学してしばらくは、新しい水槽に入った金魚のように馴染まなかったが、部に入り、英語活動をする中で、Natsukoは次第に自分のしたいこと、英語の勉強や海外経験を積み重ねていった。フィリピンにも何度か行き、ホストファミリーと交流を続け、その他アジアの国々への研修旅行、アメリカへの研修旅行にも参加した。アメリカのシカゴにある姉妹校との交流では、アメリカの家庭にホームステイをして学校に通うことでアメリカ人の高校生と話をするようになった。その中で、それまで、海外に行くこと、海外の異文化を吸収することだけに興味のあったNatsukoの考えを変えるような出来事があった。アメリカ人の高校生と日本について話をし、日本語を学んでいるアメリカ人の高校生との出会いがきっかけだった。彼女は、次のように言っていた。

「意外と日本に興味持っている子、こんなにいるんだって思った。結構、日本はマイノリティーだと思ってた。でも、行って、なんでこの人たちは日本語勉強したいんだろうって思っちゃった。だって、日本語って日本でしか通じないし、ほんとに日本が好きでないとがんばれないでしょ。で、それくらい思わせられる日本？そうやって日本でしか使えない日本語を一生勉強しようって思わせられる日本ってすごいかなって思った。着物がきれいだからとか、桜を見たいからとかそういうのもあったし、将

来、日本に永住したいとか、北海道で道場開きます、っていう子もいたし。日本のファッションが好き、アニメが好きとかいっぱいいたかも。」

アメリカ人の高校生達との出会いから、Natsukoは、国際交流には、自分の国、日本についての知識があることが大切であると感じるようになった。日本の文化や流行を英語で説明することが重要だと思った。最終的に、Natsukoは、異文化が学習できる日本の大学を選択した。これからも英語を勉強し続け、日本文化を発信したいと考えている。

Natsukoは、卒業プロジェクトで、「英語の勉強方法」について調べ発表をした。その中で、彼女は次のように述べている。

「英語に限らず語学に関して言えば、長い時間聞いてその言語にふれていることが、語学を習得する一番早い方法だと思います。私たちが今使っている日本語も、小さい時から周りの人が喋っているのを聞き、簡単な日本語から始まったものです。語学は短期間でおこなう学習よりも、継続的な学習に効果が見られるものです。もっと、リスニング力をつけるためには、テーマ研究だけで終わらせるのではなく、継続して続けていかなければなりません。難しく考えずに、自分の日常に英語を取り入れていけば変わっていくはずです。」

Satsuki's Story

Satsukiは、両親が旅行好きであったため、小さい頃から海外旅行をしていた。彼女の母親は、アメリカに短期留学をしたこともあり、英語も話せる。子供には早くから英語とコンピュータを習わせたいと考えていた。海外旅行は、毎年、2～3週間ハワイやアジアの国々に行っていた。Satsukiは、自然と海外に興味を持つようになり、英語にも関心を持ち始めた。中学生になってからは、英語の音楽を聴いて英語の歌詞を訳したりもしていた。高校に入り、国際文化コースという語学や国際文化を学ぶ環境に入り、帰国子女の生徒とも多く知り合うようになった。英語について、当時、彼女は次のように言っていた。

「英語が好きな人は、私の周りの人、国際文化の人って、何かしら海外

旅行をしたことのある人、英語に触れたことのある人、英語が嫌いっていうのは行ったことがないとか、機会が無い人が多い。勉強しかしていないと英語に対してネガティブなイメージがある。成績が悪いと嫌いになるかもしれない。」

英語の勉強や英語での活動には積極的なSatsukiだったが、1年の時に行った家族旅行で、彼女は、英語に対する考え方を変える経験をした。次のように書いている。

「高一の時にメキシコに行って思ったんですけど、あの、ほんとに、旅行で行ったんですけど、英語通じないんですよね、全然、ほんとになんかwaterも通じないんですよ、bus stopも通じなくて、もうどうしようって、私もスペイン語とってて、辞書とかも持ってたんで、私が唯一なんとか単語ぐらいはわかるっていうんで、ちょっと頼られたりしましたが、それで、えーこんな英語でも通じないのって思って、だから、全然、しゃべれない人はしゃべれないんだねって。世界共通語って言いながらやっぱりそういう基本的な、waterとかbus stopでも通じないなんか、日本人でもそこまでないと思うので、メキシコっていう発展途上っていうのも、教育っていう問題もあるのかもしれないですけど、いくら世界共通って言っても、通じないところ、通じない人もいるって実感しました。私、ほんとにびっくりしました。メキシコなんてアメリカに近いからバイリンガルかと思ってきました。」

世界は広く、英語が通じない場所も多くあると知ったSatsukiは、その後、スペイン語の勉強にも力をいれるようになった。

Honey's Story

Honeyは、ミャンマーで生まれた。小学校は現地校に行ったが、途中で父親の考えで、インターナショナル・スクールに転校した。父親は、Honeyがインターナショナル・スクールで英語を勉強することで、将来への投資になると考えたのだった。インターナショナル・スクールでは、授業はすべて英語でおこなわれ、休み時間も英語を使うことを義務づけられ

ていた。英語をきちんと勉強したわけでもなかったが、Honeyは英語ができるようになった。ミャンマーの田舎から出てきたHoneyは、自分でも内気であったと言っていた。それが英語を勉強するうちに性格が変わってきたと言う。中学1年になって、突然、父親の仕事の関係で日本に来ることになった。Honeyは、英語の環境から、突然、全く知らなかった日本語の環境に入った。公立の中学校に入り、授業を日本語で受けた。初めはまったくわからなかったそうだが、補習日本語授業を受けたり、インターナショナル・スクールで英語を学んだ時のように、生徒と積極的にしゃべり、自分を日本語に浸す中で日本語を覚えていった。英語は得意科目だった。英語についてHoneyは次のように語っている。

「英語は新しい自分を気づかせてくれたものですね。私、すごい無口な子だったんですよ。人の前に立つの怖いし、緊張するし、小さい頃は自分に自信を持っていなかった。裕福な家庭ではなかったし、お父さんが日本に来るまでは。でも、インターで英語を習い始めて変わりました。英語を話すスタイル、自分が思っていること、主張することが多いんじゃないですか。だからインターに行って環境が変わったのもあるし、英語をしゃべれるようになって自信を持てるようになった。2ヶ国語をしゃべれるようになっただけでも、他の人より自分は力を持ってる、そういう自信をもてるようになって、しゃべれるようになったり、積極的になったり、今は、みんなには、社交的とか積極的とか。ステップ、ステップで変わったんですよ。ミャンマーにいたときは、ミャンマー語しかしゃべれなくて、普通の公立校しか通っていなかったし。でも、インターに行ったときはミャンマーの中でも自分のレベルが上がったっていう気分。」

日本に来てからは、Honeyにとって得意な英語は、武器だった。英語でおこなう活動にも参加した。日本語も、学校の授業を受けたり、友人と話すことで上達していった。自分の将来を考えた時に、Honeyは、資格を取ろうと決め、医療系の大学に進学を決めた。徐々に彼女の中での英語の位置は小さくなり、日本語が大部分を占めるようになった。日本に住むと決

めた以上、日本語を完全にマスターすることが仕事をしていく上でも重要であると思っているからである。

3-2 学習者のストーリーからの示唆

それぞれのストーリーは、学習者が、自らの自己を築き上げていく過程を示している。

この6人は、日本中の英語学習者の代表ではないが、それぞれの英語との関わり方から、英語の勉強方法、英語の存在の意味、英語の役割、が見えてくる。

6人は、いずれも英語には関心を持ち、英語の勉強には前向きに取り組んで来た。けれども、大学での勉強で「英語」を勉強したい、と決めたのは、Fumikoだけであった。あとの5人にとって、英語はコミュニケーションの「手段」、あるいは「道具」であり、そのために英語の勉強はするけれども、英語を言語として勉強する、という選択はしていない。これは、今の世界での英語の位置をよく表している。英語は、英語を勉強する、というよりも、英語で何かを勉強する、という手段として使われていることが多いのである。

Fumikoのストーリーからは、「英語を勉強することで自分を守る」ことができたことがわかる。Kazuoのストーリーでは、英語を話すことにも文法の学習が必要であることを教えてくれる。Natsukoのストーリーは、2つのことを教えてくれる。1つは、英語をコミュニケーションの道具として使う時には、「間違っはいけない」、などという既成の価値観に左右されずに、自分の言葉で伝えようとする、もう1つは、英語の学習には、継続が必要であることである。Satsukiのストーリーからは、英語が世界言語であるという多くの人が信じていることが、実際は違うことを教えてくれる。英語だけではなく、他の外国語も機会があったら学習することが必要であろう。Honeyのストーリーは、日本にいる外国人がどのように言語を学んでいったかという例である。また、英語の力、英語が武器に

なる、という考え方も興味深い。英語を話すことで自分の性格までが変わったというHoneyの言葉には、外国語学習の効力が伺える。

3-3 学習者のストーリーに見る自己変容

Fumikoのケース：英語を勉強することは、Fumikoの自己変容に大きく寄与している。中学校時代のいじめの経験を乗り越えたのも英語への興味と英語学習への意欲であった。英語への自信が、強い自己を育て、困難を克服することができた。

Kazuoのケース：中学校（ペルーの日本人学校）での英語の勉強は、Kazuoにとって楽しいものではなく、なぜ英語を勉強するのかというはっきりとした目標も無かった。しかし、英語を実際に使いコミュニケーションを取る、という実体験により英語を話すことに大きな興味を持ち、英語はコミュニケーションの手段であり、英語を話すことは楽しいと考えようになった。高校で、留学生と話す経験を積み重ねるにつれて、Kazuoは、文法の学習も英語を話す上で重要であると考えようになった。Kazuoは、英語が通じたという経験を持ってから、常に第二言語における理想の自己（ideal L2 self）を持ち続けており、それに近づくために英語を話す機会を掴み、どのようにすればよいかを考えていることを見ると、理想の自己は、モチベーションへの大きな原動力になることがわかる。

Rumikoのケース：Rumikoは、中学校の時には、英語の成績がよいことが英語ができることであるというビリーフを持っていたが、高校で帰国子女に会い、そのビリーフは、英語が話せることである、に変化し、自分は、英語ができない、と考えるようになった。また、中学校では、英語の勉強は英語の授業でするものであると考えていたが、高校では、上級生のアドバイスを受け、自分で受験勉強ができると考えるようになった。英語の学習方法については、中学生の時には、文法・構文、語彙を勉強することであるとと考えていたが、高校に来て、英語を通じて何かを学ことが重要であると考えようになった。中学校では、暗記が英語を勉強する際の唯

一の方法であると信じていたが、高校の英語キャンプで、英語の学習方法は多様であると考えようになった。

第二言語の理想的な自己 (ideal L2 self) は、そこに到達する可能性を自身が信じている場合は、モチベーションの原動力として機能するが、Rumikoのように、自信が崩された場合は、機能しないことがわかる。Rumikoの場合は、しかしながら、第二言語学習経験 (L2 learning experience) により、学習への考え方、ビリーフを変える機会があり、自律学習へと進むことになった。これは、学習者は、個々の学び方 (personal agenda) (Schuman & Schumann, 1977) を持つことを示している。

Natsukoのケース：Natsukoは、最初の高校では、受け身であり、英語に関するゴールは、よい成績を取り有名大学に進学することであると考えていた。フィリピンに行ったことと、ダンススクールに通うようになり、多くの人と接したことで、英語を勉強することは、人との交流、文化の共有であり、自分の好きなことを見つけることが、学習のゴールであると考ええるようになった。

英語学習に関するビリーフの変化では、間違いを恥ずかしいこと、ネイティブのように英語を話すことがいいことであるというビリーフから、フィリピンの体験を経て、アクセントのある英語でも意味が通じる限りは受け入れられるというビリーフに変わった。

英語のスキルに関しては、外国体験や外国人との交流によって、スピーキングが最も大切であると考えていたが、外国人との交流の中で自分の英語の不十分さを実感し、受験勉強型の学習も英語の力を上げるためには必要であると考えようになった。

学習方略については、Natsukoは、中学校の経験から、英語の勉強は、机に座り、練習問題をおこなうものであると考えていたが、高校の経験から、英語は、英語を発信すること、プレゼンテーションをおこなうこともある、と考えるようになった。

Natsukoのケースでは、外的な要因 (学校や教師、社会からの期待)

から、あるべき第二言語における自己 (ought-to L2 self)、例えば、学校の英語の成績がよいこと、受験勉強をする自分、から脱却して、自分なりの理想自己を作りあげたことが顕著である。自己変化への可能性を信じていたことも再出発（転校、大学選択）の際に大きな原動力になった。

Satsukiのケース：Satsukiは、英語が、リンガ・フランカであると信じていたが、メキシコでの体験がそれを覆した。英語が通じない多くの場所があることを実感し、スペイン語の学習へのモチベーションが高まった。

Satsukiの場合は、幼少期からの海外経験もあり、英語学習に関するモチベーションも高かった。第二言語における理想の自己 (ideal L2 self) は、Satsukiにとっては、英語が堪能な自己、であったが、メキシコの経験で、英語だけでなく、他の言語（Satsukiにとっては、スペイン語）もできる自己へと変容した。

Honeyのケース：Honeyの性格は、インターナショナル・スクールで英語で学び始めてから変化した。それまでは地元の学校に行っていたが、彼女は自分を、おとなしく受け身で皆の前でスピーチができる生徒ではなかったと述べている。インターナショナル・スクールに通ったことで、2つの言語（ミャンマー語と英語）ができることで自信がついた。この自信のお陰で、Honeyは社会的になり、友人も増えた。彼女は、自己の変化を英語を学んだことにある、と述べている。ある意味で、英語を学習したことによって自己解放に繋がったとする例が、Honeyのケースである。

II 外国語学習と自己

外国語を学習することは、母国語で学習する教科学習と違い、多くの影響を学習者に与える。自己のアイデンティティーに関わる影響、感情や性格に関わる影響、モチベーションや考え方に関わる影響、など数知れない。

プラスの影響を上記に概観した研究などから見ると、性格が開放的になる、自信がつく、問題解決の原動力になる、コミュニケーションへの意欲が高まる、決断力がつく、異なる価値観を知ることによって精神的な危機を乗り越える、自己発見・自己反省など、が挙げられる。

一方、マイナスの影響としては、自信喪失、自己への劣等感が募り、モチベーションが下がる、既存の社会への不適合、などが挙げられる。

Ⅲ 外国語学習への示唆

第二言語における理想の自己 (ideal L2 self) が、言語学習へのモチベーションになる、という結果を考えると、英語教育の場においても、理想の自己を個々の学習者が作り上げることができるような授業が望まれる。暗記・問題解読など、訓練的な学習の繰り返しの中には、その可能性は少ない。

学習の中に、仮想L2 コミュニティーの中での言語使用を入れる、また、外国文化を知る、異なる価値観を知る、言語の背景を知る、など、L2 社会への関心を引き起こすことで、学習者の中に、具体的な将来像が浮かび上がってくる。

学習者の過去の外国語学習歴・海外経験などを知ることが重要である。帰国子女、あるいは外国籍の学生など、複数の外国語を使う環境にいた学習者への理解も必要であろう。また、学習の過程で、個々の学習者の自己がどのように変わっているかを把握することも必要であろう。

金岡 (2010) は、次のように述べている。

「大学英語教育学会実態調査委員会 (2003) によると、大学生の語彙力、文法理解力、構文読解力や英作文能力の低下など、4 技能に関する学力不足が大学教員から報告されているが、気になる点は、全体として語学力の問題に重点が置かれている点である。テストなどの「数値的・量的概念による結果」を前提に、知識やスキルの習熟度や到達度だけを問題視し

ているように感じられる。人間的成長につながる学習能力や方法を大学生たちに習得してもらうことが、本質的かつ正統的大学教育理念であると訴える大学教員もいる。大学での理想的な学びとは、自己のあり方、生き方という文脈にそって英語学習態度や学習方法を考える、知識やスキルの一律的・一方的伝授ではなく、学習者の内面性や人性をとらえたプロセス重視、対話重視の学習環境づくりが必要である。」

また、Yashima (2009) は、「外国語を学ぶことは、私達の世界との繋がりが方や自己を認識する方法が変わることである。第二言語の理想的な自己は、教育の先導によって作られることが可能である。」と述べ、外国語教育の重要性を指摘している。

モチベーション研究からは、外国語教育では、経験を重視した未来像の明確化が望まれることがわかり、ビリーフ研究からは、学習者の経験の重要性がわかった。未来像を、授業やカリキュラムの中に構築することで、学ぶ側にも明確な目標 (goal) が見えてくるのであろう。教育が果たす役割は大きい。

外国語教育は、単に言葉を教えるだけではなく、言葉を通じて考え方、価値観、文化、文学などのナラティブを学ぶことである。そして、それらは、既存の価値観を新しい目で見るときの力を与えてくれる。つまり、Bruner (1996) が述べた可能性 (possible) を教えることでもある。外国語教育は無限の可能性を秘めている。

文献

- Williams, M., & Burden, R.L. (1997). *Psychology for language teachers: A social constructivist approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei (2010). Where does psychology and second language acquisition research connect? In Murphy, R.S. (2010) (Ed.) *The Language Teacher*, 34.2 March/ April, 2010, Readers' Forum, 19-23.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

- Gardner, R.C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London, GB: Edward Arnold.
- Markus, H. & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, 38, 220-337.
- MacIntyre, P. D., Mackinnon, S. P., & Clement, R. (2009). The baby, the bathwater, and the future of language learning motivation research. In Z. Dörnyei & Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 43-65). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 motivational self system among Japanese, Chinese, and Iranian learners of English: A comparative study. In Z. Dörnyei & Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 43-65). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Csizer, K. & Kormos, J. (2009). Learning experiences, selves and motivated learning behavior: A comparative analysis of structural models for Hungarian secondary and university learners of English. In Z. Dörnyei & Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 43-65). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Dörnyei, Z. (2001). New themes and approaches in second language motivation research. *Annual Review of Applied Linguistics*, 21, 43-59.
- Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp.144-163). Bristol, UK; Multilingual Matters.
- Tanaka, K. (2011). Long and winding road: A study of highly motivated learners of English in Japan. *International & Regional Studies, Meiji Gakuin University*, No.40, 23-53.
- Horwitz, E. K. (1987). Surveying student beliefs about language learning. In A. L. Wenden & J. Rubin (Eds.), *Learner strategies in language learning* (pp. 119-129). New York: Prentice Hall.
- Yang, T.Y. & Kim, T. (2011). Sociocultural analysis of second language learner beliefs: A qualitative case study of two study-abroad ESL learners. System (in press), 1-10.
- Kim, T. & Yang, J. (2010). Learner beliefs in study-abroad experience: A qualitative case study of two Korean ESL learners. *English Teaching* vol.65, No.2, 75-99
- Suzuki, S. (2012). Language learners' beliefs: Development and change. Unpublished doctoral dissertation. Temple University, Japan.
- Benson, P., & Nunan, D. (Eds.). (2004). *Learners' stories*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Schumann, F.M. & Schumann, J.H. (1977). Diary of a language learner: An introspective study of second language learning. In H.D. Brown, C.A. Yorio and R. Crymes (eds.), *On TESOL 77 teaching and learning English as a second language: Trends in research and practice* (241-249). Washington, DC: TESOL.
- 金岡正夫 (2010). 自己の気づきを重視した英語ライティング授業. *Japan Society of English Language Education*, 261-270.

外国語学習がもたらす可能性について

Bruner, J. (1996). The culture of education. Harvard University Press. Cambridge, Massachusetts

(小山工業高等専門学校教授)